

## 「不十分な礼拝」

マタイによる福音書 28:16-20（新共同訳聖書）

## I 導入部

- みなさん、おはようございます。お祈りをもって、メッセージを始めていきたいと思います。お祈りしましょう。
- 本日の説教のタイトルは、「不十分な礼拝」というものです。礼拝でのメッセージなのに、タイトルが「不十分な礼拝」ってどういうことだ！？と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、今日私たちはこの場所で礼拝を捧げています。
- 私たちがまず問わたいのは、私たちの礼拝は「十分な礼拝」であるかということです。あなたの礼拝は、「十分な礼拝」でしょうか。
- 私は、もちろん毎週、十分な、心からの礼拝を捧げたいと願っています。しかし、じゃあその通りいつも十分な礼拝を捧げているかと問われると、とてもそうは言えない。不十分な礼拝を捧げている自分に出会うことがあまりにも多いのです。
- 実は、さきほど読まれた箇所が登場する弟子たちも、「不十分な礼拝」を捧げていました。イエスさまの最も近くにいた弟子たちだから、いつも十分な礼拝を捧げていたわけではない。むしろ、あまりにも「不十分な礼拝」を捧げていた。
- 今日は、そのような彼らに、「不十分な礼拝」な礼拝を捧げていた弟子たちに、どのようにイエスさまが語ってくださったのかということを見ていくことを通して、イエスさまを一緒に礼拝していきたいと願っています。

## II 本論部

一. しかし、疑う者もいた

- それでは、16、17 節をもう一度お読みします。

28:16 さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。

28:17 そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。

- 先日私たちはイースターを祝いましたが、十字架にかかり、よみがえったイエスは、弟子たちに、ガリラヤへ行き、ある山に登るように命令されました。
- その山に登った弟子たちが、イエスに出会ったとき、彼らは、「ひれ伏した」、つまり礼拝をしたとあります。しかし、それに続いて衝撃的な一言が記録されています。このようにあります。「しかし、疑う者もいた。」
- このとき彼らは、礼拝をしているのです。よみがえったイエスさまが目の前にいて、彼らは、これから、全世界に遣わされていく。そのために、礼拝をしているのです。
- しかし、驚くべきことに、礼拝し、これから遣わされていく者たちのなかに、疑う者がいたのです。
- 復活のイエスさまにはっきりと出会ったのにもかかわらず、この方を礼拝しているにも拘らず、これから遣わされていくにも拘らず、疑う者がいた。
- 彼らが何を疑っていたのかは書いていませんが、おそらく復活を疑っていたのではないかと言われます。目の前にイエスさまがいるのに、これはひょっとしたら夢や幻ではないか。まだ疑っていたのではないか。
- あるいは、気まずかったという意味かもしれないという指摘をする人もいますね。弟子たちはイエスさまを裏切ったわけですが、そのイエスさまに呼び出されて、怒られるのではないかと思っていたのかもしれない。

- あるいは、恐れていたという意味ではないかという指摘もあります。この箇所直前では、ユダヤ人のリーダー、指導者たちが、イエスは復活していないという偽りのストーリーを流そうとします。イエスさまが復活したと信じることは、これらのユダヤ人リーダーたちの宗教的・政治的権力、あるいはローマ帝国の巨大な権力に逆らうことでしたから、恐れを抱く気持ちはよく分かります。
- ともかく、イエスさまの最も近くにいた弟子たちのなかにすら、疑う人がいたのです。
- イエスさまに出会って、これから遣わされるために、いま礼拝をしているにも拘らず、礼拝することを妨げる思いを持っていた弟子たちがいた。
- みなさんは、いかがでしょうか？
- 今、礼拝を捧げているなかで、礼拝することを妨げる感情を持っておられる。そのような方もいらっしゃるのではないかと思います。
- この弟子たちのように、疑いがある。そのような方もいらっしゃるでしょう。神さまなんて本当にいるのか。愛の神がいるなら、どうしてこんなことが起こるのか。
- イエスは本当によみがえったのか。そしてイエスさまがよみがえったように、私たちもやがてよみがえる。死ぬことがあっても、よみがえって、永遠に生きると聖書は言っている。でも、それに対して、疑いがある。
- あなたにも、イエスさまに対しての、気まずさがあるかもしれない。今週やってしまったあの罪。イエスさまを裏切ってしまった。もう合わせる顔がない。
- あるいは、恐れているものが、恐れていることがある。この礼拝から帰って行く場所のことを考えると、恐れがある、不安があるという方も、この中にはいらっしゃるでしょう。

## 二. イエスは、近寄って来て

- もし、みなさんのなかに、イエスさまへの疑いを覚えておられる方がいらっしゃったら、
- もし、みなさんのなかに、イエスさまに対して気まずさ後ろめたさを覚えておられる方がいらっしゃらば、
- もし、みなさんのなかに、なんらかの恐れを抱いておられる方がいらっしゃらば、
- あなたが今、「不十分な礼拝」を捧げているとすれば、
- 喜んでください。喜んで欲しいのです。なぜならあなたに、良い知らせ、福音があるからです。
- 18節をご覧ください。

### 28:18 イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。

- ここで、イエスさまは、疑う弟子たちに近づいて来てくださった。
- イエス様という方は、上から見ていただけの方ではありません。逆なのです。天から降りてきてくださり、私たちのただなかに、人間たちのそばに来てくださった。そして、今でも、あなたのうちに、聖霊にあって、生きていてくださっている。
- そして、この礼拝に、イエスさまが、あなたを導いてくださった。
- この箇所でも、疑う弟子たちに、「おい、お前ら、何疑ってんねん！」と叱りつけたりするのではない。近づいて、語りかけてくださる。
- 大丈夫だ。恐れなくて良い。私はあなたを愛している。私はあなたの全ての罪を赦すために十字架にかかったのだ。あなたは神の国に入れられている。私とあなたとともにいる。疑わなくて良いのだ。
- 私の人生を振り返ると、本当にイエスさまの方から、何度も何度も近づいてくださったということを思い出すんですね。
- そもそも、イエスさまは、私をクリスチャンの家庭に生まれさせてくださった。でも、それでも私は、イエスさまから離れようとした。何度も話しましたが、中高生のときは、聖書を真面

目に聞かない方がかっこいいと思っていた。大学生になっても、イエスさまに頼らなくても、礼拝なんかしなくても、全然大丈夫だって思っていた。

- 実は昨日は、私が平日に働いている KGK キリスト者学生会という大学生・専門学生のためのクリスチャンの働きがあるのですが、その新入生歓迎会がありました。今年もたくさんの新入生が（青葉台教会からも）、来てくださり、一緒に賛美をしたり、学生の証しを聞いたり、メッセージを聞いたりしたのですが、
- 思えば私が大学一年生の頃は、教会にも行かず、また寮の先輩に KGK を紹介されたものの、確か新入生歓迎会は行きましたが、その後の半年間は一回しか行かず、しかもその一回も「用事がある」と嘘をついて帰りました。
- でも、教会の方が、あるいは KGK の先輩が、何度も何度も誘ってくださり、何回も断ったら申し訳ないと思って行った教団のキャンプで、本当にイエスさまの愛を知らされたんですね。
- もちろんその後も、イエスさまに対して疑いを覚えたり、罪を犯して、イエスさまに対して気まずさを覚えたり、人生に恐れを覚えるときがありました。
- でも、そのたびごとに、イエス様の方から、私に近づき、真理を教えてくださいました。イエスさまの愛を心に感じさせてくださり、経験させてくださった。
- あなたにも、イエスさまは近づき、語りかけてくださるのです。

### 三. わたしは天と地の一切の権能を授かっている

- 弟子たちに近づかれたイエス様はこのように言われました。18 節をもう一度ご覧ください。

28:18 イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。

- イエス様は、ここで、ご自身が天と地の王であることを宣言されています。
- この王さまは、普通の王さまとは違います。その権威は普通の権威とは違うのです。
- この当時の普通の王さまは暴力で、あるいは富や経済力によって、人々を支配します。聖書は、そのような王は、実際は王ではない。イエスだけが王である。大統領であっても、天皇であっても、総理大臣であっても、究極的にはあなたの支配者ではない。イエスだけが王である。そのように聖書は語っています。
- もちろん、イエスには、この世の普通の王様と同じように人々を支配することは、やろうと思えばできます。しかし、イエスは、この世の王によって十字架にかけられました。愛するゆえに、仕えるために、自らを捨てられた。富んでおられたのに、それを捨て、貧しくなられた。
- イエスさまの支配は、仕え、愛することによる支配なのです。あるいは、イエスの支配においては、無理やり人の心や行動を動かすということはないです。もちろんやろうと思ったらできるでしょう。しかし、あまりにも人を愛するゆえに、人に自由を与える、そのような不思議な支配方法をされる、不思議な王さまであるのです。
- しかし、人間は、恵みとして与えられた自由を濫用し、神を傷つけ、また互いに傷つけ合い続けています。それは、テレビをつければ、新聞を見れば、また私たち自身の周りを見れば、よく分かるでしょう。今週も悲しいニュースがたくさんありました。
- 世界の闇は深いです。しかし、闇は深まれば深まるほど、希望は輝く。そのなかで本当に思わされるのは、教会はいかに素晴らしい希望をもっているかということです。
- イエス様は言われたのです。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。」
- 私は世界の王である。だからこそ、この世界をあきらめない。この世界の回復をあきらめておられない。
- 私たちは、不十分であっても、礼拝を捧げるなかで、聖書を読むなかで、祈るなかで、イエス様の愛を知ることができます。もちろん、私たちへの愛を知ることができます。でも、さらに、イエスさまが、この世界に持つておられる愛をも知ることができる。
- イエスは傷ついた世界を、この社会を、愛されている。イエスさまがあなたをあきらめておられないように、イエスさまはこの世界を、この社会をあきらめておられない。それはイエスさ

まが世界の王であるから。その心を聖霊なる神の助けによっていただくときに、私たちは世界を愛する者となる。愛された者として、愛する者となっていく。

- イエス様がこの世界を愛されているから、私たちもまた、世界を愛するのです。

#### 四. あなたがたは行って

- 19 節からをお読みします。

28:19 だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、

28:20 あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

- 神学校には「宣教学」という分野があります。
- これは英語だと **Missiology** と言うのですが、**mission** ということばがもとになっているんですね。この言葉は、現在は企業などでもよく使われますが、多くの場合「使命」と訳されることばです。
- その意味で、**mission** を「宣教」と訳してしまうと、ちょっと意味がずれるようにも思います。
- 宣教は、「教え」を「宣べる」、伝えるという意味ですので、何か、伝道することだけを意味するように聞こえてしまいがちですが、そうじゃあないんですね。
- **mission** はクリスチャンとしての「使命」に生きることです。クリスチャンとしての「使命」に生きること。この箇所のことばで言うならば、「イエス様の弟子として生きること」であります。イエス様の弟子として生きること言い換えるならば、イエス様のように生きることです。
- もちろんその中に伝道することは含まれますし、最も大切なことのひとつです。しかし、それとともに、イエスさまのように、誠実に、妥協することなく、でも愛をもって、一つ一つの仕事や、家事や、勉強や、政治だって、あるいは趣味だって、聖書からすれば大切なことです。
- イエスさまのように、生きるということ、一見取るに足らないような日々の小さな働きであっても、実はイエス様の宣教の欠くことのできない大切な一部であるのだということを思い出しながら、日々を生きていく。それが私たちの **Mission**、「使命」である。
- さらにこの箇所では、弟子とされた者に、洗礼を授けること、そしてイエスが弟子たちに語った教えを教えることが、宣教の大切な部分として命じられています。
- すなわち、洗礼と、聖書を語ることが、イエス様の弟子として、イエス様のように生きていくことの鍵であると言うのです。
- この二つがなされる場所、それは教会です。教会が、弟子となることの鍵であるというのです。教会が、真の弟子を作る。たとえ不十分な礼拝であったとしても、礼拝は、確実にあなたの生き方を変えるのだということです。

#### 五. 世の終わりまで

- もちろんそれでも、うまくいかないこともあります。イエスさまの弟子として生きていこうとすれば、反対に遭ったり、迫害に遭うこともありますし、あるいは自分たちの弱さのゆえに失敗してしまうこともあるでしょう。
- しかし、私たちが忘れてはならないのは、私たちは一人で派遣されるのではないということです。イエスは最後にこのように語ります。20 節。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」
- 世の終わり—再びイエス様が来られ、すべての出来事の意味が分かり、すべての悲しみがなくなるその日、厳粛な裁きがやってくるその日が来る。
- それまでの間は疑いをもつことはあるでしょう。罪を犯して、失敗して、気まづくなったり、後ろめたく思うときだったあるでしょう。恐れることもある。でも、イエス様は私たちとともにおられる。

- 私たちのそばに近づいてくださり、支え、真理を思い出させ、ご自身が王としてもっておられる世界への愛を与えてくださり、宣教に送り出し続けてくださる。
- だから、私たちはここから、安心して遣わされていきたい。不十分な礼拝であったとしても、イエスさまは、ここにいてくださり、そして私たちがこれから帰っていく場所にもいてくださっている。だから、安心して、イエスさまと一緒に、それぞれの場所に、それぞれの使命を携えて、遣わされていこうではありませんか。お祈りしましょう。